情報は文脈と受け手の判断がいのちだ

■福島 智

初夏のある日，私は自宅玄関のそばで妻に尋ねた．

「これ，新しいかなあ？」

両手にお茶のペットボトルを持っている．ほぼ同じ重さだけれど，どちらかは開栓していたような気がしたからだ．後ろのリビングの方から妻が走って近づく振動がする．そして私の手の指に，珍しく慌てたように指点字を打った．

「変な虫，入れてしまった」

18 歳で視覚と聴覚に障害を併せ持つ盲ろう者となった私は，発話は音声で行うが，「聞く」時は指に点字を打ってもらう指点字で会話する（なお，指点字は通常の点字同様仮名だけなのだが，普通の音声の会話も漢字仮名混じりで表記するので，ここでもそれに習う）．

妻の言葉は分かったけれど，「どこに」，「何を」が問題だ．まさか，「ペットボトルのお茶に，虫を」入れてしまったわけじゃないだろうから，「どこに」は家の中にということだろう．問題は「何を」入れたかだ．

「どんな虫？」「分からない，蜂かもしれない」それだけ言って，妻はまたリビングの方に走って行ってしまった．

「どこに」は推測できたが，「何を」は分からない．こうなると，自分の情報のストックによる推測で判断するしかない．都内の集合住宅の 7 階に我が家はある．そこの窓から入って来る「虫」で，危険性のあるものは何か．「ヒアリ」？　まさか．近年，港湾地区で問題になってはいるが，海から離れた建物の 7 階に，いきなり来ることはないよな．

■ 福島 智
東京大学教授，障害学

1962 年生．3 歳で右目を，9 歳で左目を失明，18 歳のときに失聴し，全盲ろうとなる．1983 年東京都立大（現・首都大学東京）に入学，盲ろう者で全国初の大学進学．金沢大学助教授などを経て，2008 年から現職．教員のほか全国盲ろう者協会理事を務める．

「セアカゴケグモ（背赤後家蜘蛛）」？　違う．妻は生き物の分類は比較的正確に表現する．蟻は昆虫だが，蜘蛛は昆虫ではない．

こうなると，私も蜂の類しか思いつかない．蜂だとして，どんな蜂なのか，などと考えつつ，とりあえず私ができる自衛策をとる．と言っても，半袖のワイシャツしか着ていなかったところへ急いで長袖のジャケットを羽織っただけなのだが…….

文字情報にしろ，そばにいる人たちの会話にしろ，周囲の環境情報にしろ，盲ろう者は一般の人に比べて非常に限られた情報しか入手できない．したがって，社会参加のためには「通訳・介助者」と呼ばれる支援者によって，こうした情報のギャップを埋めてもらう必要がある．

しかし，個人差はあるにしても，盲ろう者が単位時間あたりに得られる情報はきわめて限られている．その限られた情報を補うものは，正確な情報のストックと，その場の「文脈」の理解である．おそらくこれは，一般の人にも当てはまることだろう．

さて，くだんの「変な虫」とは何だったのか．どうにかその虫を外に追い出した妻が，後日調べてみると，おそらく「ベッコウガガンボ」という昆虫らしい．

「ガガンボ」だって？　日本語にそんな響きの言葉があるのかよ？　ところが驚くなかれ．広辞苑の見出し語に，ちゃんと載っているのである．

上質の情報を得るには，文脈の適切な理解とともに，自身（受け手）の正確な情報ストックの絶えざる更新が不可欠だと痛感したのだった．